

小テスト

小テストの実施を事前にアナウンスすることで、学生の授業への集中力を高めることができます。また、小テストの結果で学生も教員も授業内容の理解や定着の度合いを確認することができます。さらに、教員がフィードバックすることで、学生と教員間の双方向型授業に繋がり、より理解を促すことができます。

科目名：動物生理学

担当者：青山真人 先生（農学部）

この授業では、学生の理解を確認するために2～3回程度、小テストを実施しています。答えは青山先生が間違いや無回答のみチェックし、次回に返却します。

答案と同時に解説も配布されます。解説には正解だけでなく、多かった間違いの例や注意点などが記載されています。

また、受講者のうち何名が正解したか、それに対する先生のコメントも記載されています。
例) 6名／50名 思ったより少なかった

この解説は配布するだけでなく、先生から口頭でも説明されていました。間違いの例を教材として敢えて示し、関連づけて正解を解説されることで、より理解を促していたように感じました。リアルな数字と教員の率直なコメントは、学生の気持ちを自然な形で授業に向けさせるのではないのでしょうか？

2016年7月27日

動物生理学 第2回小テスト解説

今回のテストで多かった間違いの例、必要な注意点を記載しています。下記以外の正解については、各自資料等で確認しておいて下さい。
テストの答案には、間違いや無回答のときにだけ赤か青のチェックがあります(特に正解を書き込んでいるとは限らない)。何も書き込んでないが、「OK」か、「まあいいか」的なことが書いてあれば、正解という事です。

多かった間違い、注意点など

問題1

① **「反射弓」を説明**：ちゃんと書けていた人は意外少なかった。反射の5つの構成要素を挙げて「反射弓」を説明し、これを単シナプス反射としている人が多かった。「反射弓」は、どの反射にも適用できる一般的なシステムである。あとは、「脚を赤い反射」としている(例、指し指、膝シナプス反射とそういうことではない)。

② **「細胞」**：これも、意外ちゃんと書けている人は少なかった。講義で触ったことは、ある種の「グリコーゲン」が細胞に蓄積して形成していること、活動電位の伝達にかかわること。神経伝達のメカニズムは覚えておきたい。あと、気になったのは「電気が流れる」という表現。誰かにそれとおどりが、「活動電位の伝達」などの表現の方がいい。

③ **「伝導速度」**：思ったよりよく書けていた。(配布した資料には書いてないのに)、ゴッソウの名は誤記も回答にも書いているので、覚えておこう。

④ **「細胞膜」**：「細胞膜」はできていたが、「イオンチャンネル」はできていた人が思ったより少なかった。「解糖酵素」「解糖酵素」という解答、センスはいいと思ったが、間違い。

問題2

① **「静電位を上げるイオン」**： 6名/50名 思ったより少なかった

*まあ、基本的なことは理解しているのかと思われるが、説明が不足していたり、変えている事柄が交錯しているような解答もあった。大事なものは、細胞の内外のイオンの濃度差、これを維持するためのポンプの存在、カリウムイオンのチャンネルだけが書かれていることなど、「濃度勾配」と「電位差」の釣り合いのことなど。

② **「電位を伝えるメカニズム」**： 9名/50名 人数的にはこんなものか？

*多かった間違い(正確さに欠ける記述)では、「C濃度が調節される」という記述。C濃度

クリックして**拡大**